

コリント人への手紙第一15章35-58節 「復活のからだ」

1A 復活のからだ 35-44

1B 蒔かれた種 35-41

1C 死ぬことによる命 35-38

2C 異なる体 39-41

2B 死者の復活 42-44

2A 御霊に属するからだ 45-49

1B いのちを与える御霊 45-46

2B 天から出た方 47-49

3A 朽ちない体 50-58

1B 体の変貌 50-53

2B 死に対する勝利 54-57

3B 無駄に終わらない労苦 58

本文

コリント人への手紙第一 15 章を開いてください。前回、34 節まで見てきましたが、残りの 35 節以降を読んでいきたいと思えます。コリント人への第一の手紙から、コリントの教会には多くの問題があることがわかります。けれども、そのおかげで、パウロがその誤りを正していく中で、神の教えをしっかりと説き明かしていることが、とても幸いなことです。15 章もその一つです。彼らの中に、死者の復活がないという者たちがいたので、それでパウロが、復活について、15 章ほど詳しく、分かり易く教えている箇所は、聖書の他にないのではないかと思います。

前回のおさらいをします。死者の復活はないという者たちに対して、第一に、キリストがよみがえられたことの事実を述べました。そのよみがえりが福音の中心であり、その言葉によって救われています。第二に、死者の復活がなかったとすれば、キリストの復活もなかったのであり、宣教も信仰もすべて空しいものになってしまうことを話しました。第三に、キリストの復活によって、キリストに属する者たちがよみがえり、それから、万物がキリストと神の支配下に入ることを見ました。第四に、死者の復活を信じているからこそ、今の生活にて危険を冒してでも生きていく道を歩んでいることを話しました。罪の生活をしているのは、今の命のことしか考えていないからだと教えました。

1A 復活のからだ 35-44

そして 35 節にて、パウロは、そうした死者の復活を否定する者たちの、軽蔑するような言葉を取り上げています。

1B 蒔かれた種 35-41

1C 死ぬことによる命 35-38

³⁵しかし、「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」と言う人がいるでしょう。

死者について、その肉体がよみがえることがいかに馬鹿げているか、として、見下げた言い方をしています。午前礼拝でもお話ししましたが、例えを挙げます。自分が死んで、それが土に帰ります。そこで草が生えます。生えた草を乳牛が食べます。その牛が乳を出して、その牛乳を生きている人が飲みます。その人が死にました。体をよみがえらせるなら、どうやって、他の人のからだに入った成分の部分を寄せ集めることができるのか？ということです。

同じような議論をサドカイ派がしていますね。七人の夫がいた妻が、復活の日に、だれの妻になるのか？という問いです。イエス様はその問いに対して、「マタ 22:29 あなたは聖書も神の力も知らないで、思い違いをしています。」思い違いをしていると言われていましたね。パウロもここで、彼らが思い違いしていることを話していきます。

³⁶愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ生かされません。³⁷また、あなたが蒔くものは、後にできるからだではなく、麦であれ、そのほかの穀物であれ、ただの種粒です。³⁸しかし神は、みこころのままに、それにからだを与え、それぞれの種にそれ自身のからだをお与えになります。

パウロは、あまりにもあからさまに「愚かな人だ。」と言っていますね。これは、彼らを罵ったりしている言葉ではなく、叱責の言葉です。死者の復活はないとして、罪の生活をしていることをパウロは 34 節で話し、そして、「あなたがたを恥じ入れさせるために言っているのです。」と言っています。罪の生活をしていながら、死者の復活をあざけているその高ぶりに対して、「自分を賢いと思っているが、それこそが愚かなことだ」と言っているのです。箴言にこうあります、「26:12 自分を知恵のある者と思っている人を見たか。彼よりも、愚かな者のほうが、まだ望みがある。」

そしてパウロは、自然の中に見る現象に、死者の復活を表しているようなものがあるではないか、と言っています。それが、種蒔きです。「あなたが蒔くものは、死ななければ生かされません。」とされています。イエス様も、ご自分が死ぬことを、種が蒔かれることに喩えておられました。「ヨハ 12:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」イエス様がここで言われているように、粒あるいは種は、その種の形状を残したままでは、そのまま種だということです。死ぬというのは、種としての形状がなくなるということです。発芽する時に、種はなくなってしまいます。けれども、そうやってなくなることによって初めて、発芽して、成長して、多くの実を結びます。ですから、自然

のある営みを見るだけでも、死なないと生かされないという原則は見いだすことができるのです。

私は、この学びのために、グーグルで「種の不思議」と検索したら、いろいろ学校の教材で使うような内容のものが出てきました。そこで、NHK が小学生用に作成している動画がありました。¹ 発芽の様子を、ガラス越しに撮影して、それを早送りにしています。それから、いろいろな種を並べていました。それぞれの植物に、それぞれ異なる種があります。ひまわりの種と、朝顔の種は、まるで違います。つまり、言い換えると、種とその後に出てくる体は、連続しているということです。そこで死者の復活にも共通したものを見るのです。つまり、私たちが今、肉体を持っています。今の私たちに連続した体があって、その体を持ってよみがえるということです。ここが、いわゆる仏教の輪廻転生と違います。輪廻転生では、畜生という言葉があるように、死んだ後に獣にさえなることがあります。自分が違う物に変わるのです。けれども、そうではありません。私がよみがえれば、今の私の体と連続した体が与えられます。異なる体なのですが、つながりのある体なのです。

2C 異なる体 39-41

³⁹ どんな肉も同じではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉、それぞれ違います。⁴⁰ また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの輝きと地上のからだの輝きは異なり、⁴¹ 太陽の輝き、月の輝き、星の輝き、それぞれ違います。星と星の間でも輝きが違います。

体というものが、自然界でいろいろあります。人間、獣、鳥、魚、それぞれ違いますし、地上だけでなく、天上においても異なる天体があります。体といっても、いろいろあるわけですから、死者の復活の時の体を、今の肉体と同じだとする前提が、そもそもおかしいですね。

そして、その体の輝きと言いますか、それも異なります。星の輝きが違うように、今の肉体にある輝きと、後の体の輝きも異なるのです。私たちは、何とかして今の体の輝きを良くしようと願います。筋力をつけ、健康になり、また美人にもなろうとします。けれども、そこには本質はないですね。私は、中国のお婆さんのしわくちやの顔を写真で見た時に、ああ美しいなと思いました。そこには化粧が全くされていないことはもちろんのこと、農作業や家事などで、外気や日焼けによって、肌を痛めているであろう跡もあります。けれども、そんなことは全く気にせず、満面の笑みをもっているのです。美しいなと思いました。聖書では、女性には内側の美しさを教えていますね。そして、肉体の輝きを磨くにも、それはまるで石ころを磨いているようなもので、ダイヤモンドのような復活の体の輝きがあるのだよ、ということ、パウロはここで語っています。

2B 死者の復活 42-44

⁴² 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせ、⁴³ 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせ、弱いもので蒔かれ、力あるものによみがえらせ、

¹ https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005110002_00000

⁴⁴ 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

種が落ちて死ぬことによって、発芽して、生きるようになるという原則。それから、体がいろいろあって、輝きも異なるという観察があります。その二つを合体して、死者の復活は成り立っているのです。第一に、今の肉体は、朽ちるものです。けれども、その朽ちるものが死ねば、その後で、朽ちない体によみがえります。第二に、今の体は卑しいものです。罪ある体です。けれども、死んだ後には、栄光ある体、つまり、罪のない、キリストに似た体によみがえります。第三に、今の体は弱い体です。病になるし、疲れるし、また限界のある体であります。けれども、よみがえりにおいては、力ある体になります。

第四に、ここが大きな違いですが、今の体は血肉の体です。けれども、よみがえりにおいては、「御霊に属するからだ」でよみがえるのだ、ということです。御霊のからだというのは、魂しかないとか、そういうことではありません。

神の御霊によって、私たちは新たに生まれました。初めは、血肉によって生まれましたが、イエスを信じることによって、罪の中で死んでいた私たちが生き返り、霊において生きるようになりました。しかし、今の体には罪の原理が働いています。まだ、アダムから受け継いでいる罪が宿っているのです。ですから、絶えず葛藤があります。霊においては神の律法に従いたくても、肉がそれに敵対する。御霊によって生きることによって、初めて私たちは肉の欲望を満たさないことができます。しかし、復活の体には罪がありません。御霊によって新しくされて、霊の命が与えられ、贖われた霊が住むのにふさわしい体なのです。葛藤がなくなります。新しくされた霊に調和した体によみがえるのです。

2A 御霊に属するからだ 45-49

パウロは、この血肉の今の体と、復活による御霊の体の違いを、さらに詳しく話していきます。

1B いのちを与える御霊 45-46

⁴⁵ こう書かれています。「最初の人アダムは生きるものとなった。」しかし、最後のアダムはいのちを与える御霊となりました。⁴⁶ 最初にあったのは、御霊のものではなく血肉のものです。御霊のものは後に来るのです。

パウロがここで言っているのを理解するのに役立つのが、イエス様がニコデモに語られた言葉です。「ヨハ 3:5 まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」血肉の体によって生まれましたが、それは水から生まれて、肉によって生まれています。

そして霊にいのちが与えられるのは、御霊によるのです。

そこでアダムが造られた時のことを思い出しましょう。「創 2:6-7 ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」大地に水が全面を潤していました。その大地の塵から人を神は形造っておられます。つまり、水の混じった泥から人を神は形造っておられるのです。水は、肉体の成分の 50-60%を占めています。そして、母から産まれる時も人は母の胎にある水から生まれています。水によって生まれたことと、肉によって生まれているのは同じことを指しています。

そして生きているのですが、アダムには、神から「いのちの息」が吹き込まれています。ここの「いのち」は、ハイムという複数形になっています。(ハイが単数形で、ハイムが複数形です。)つまり、肉体の生命もあるのですが、神のいのち、霊のいのちも吹き込まれているのです。しかし、アダムは罪を犯して神から離れてしまいました。罪によって、神の霊のいのちからも離れてしまったのです。肉のいのちは生きているのですが、霊においては死んでいるのです。しかし、後から来られた方、最後のアダムはイエス様です。神が人となられた方であります。この方によって、神のいのちが、御霊によって与えられます。

2B 天から出た方 47-49

⁴⁷ 第一の人は地から出て、土で造られた人ですが、第二の人は天から出た方です。⁴⁸ 土で造られた者たちはみな、この土で造られた人に似ており、天に属する者たちはみな、この天に属する方に似ています。

御霊のいのちを与えるということは、天から来られたことも意味します。先ほどの、イエス様がニコデモに話された言葉ですが、「ヨハ 3:3 人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることができません。」と言われました。ここの「新しく」は「上から」とも訳すことのできる言葉です。神の御霊ですから、上からのいのちです。天からのいのちです。イエス様は、何度となくご自身が、地からではなく、天から来られたことを語られました。「ヨハ 3:31 上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。」ですから、アダムが大地の塵から形造られたけれども、イエス様は天から来られた方で、この肉体はアダムに似ており、後に来る体は、イエスに似ていると言っています。

だから私たちは、もっと上にあるものを求めないといけませんね(コロ 3:1)。自分の内には、良いもの、完全なもの、聖いものはないのです。そうではなく、「求めなさい」と主が言われたように、上からのものを求め、御霊に満たされます。そうすると、自分の肉の弱さに、キリストの恵みが働いて、弱いのに強いと告白することができるようになるのです。

⁴⁹ 私たちは、土で造られた人のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです。

ここで結論です。肉体は土で造られており、そのかたちをしています。けれども、復活のからだは、天に属する方、キリストのかたちに倣っているのです。「Iヨハ 3:2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」

3A 朽ちない体 50-58

そこで、パウロは、復活によってようやく、神の国に入れるのだという話をします。

1B 体の変貌 50-53

⁵⁰ 兄弟たち、私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

神の国を相続するのに、絶対必要なこと。それは、神の国が永遠のものなのだ、ということです。主が来られた時の約束が、ダニエル 7 章にあります。「7:27 国と、主権と、天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」したがって、その国をキリストと共に統べ治める聖徒たちも、永遠に生きる体を持っていないといけないのです。

⁵¹ 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

午前礼拝でお話ししました。パウロは、「奥義」という言葉を使っています。奥義とは、これまでは隠されていたけれども、今、明らかにされている真理です。旧約の時代に啓示されてはいたけれども、はっきりしていないこと。悟ることができなかったこと。それが、使徒たちの時代に明らかにされたということです。

何が奥義かと言いますと、「変えられる」ということです。「私たちはみな眠るわけではありません」と言っていますね。眠るとは、神の民が死ぬことです。旧約時代にも、人々はよみがえるという啓示は与えられていました。終わりの日、主が来られる時に、眠っていた者たちはよみがえるのです。ところが、主がすでに来られました。主は天に昇られましたが、すぐに来ると言われました。すると新たな問題が出てきます。これまでは、死んで終わりの日によみがえるということだったのですが、

死ぬ前に主が来られたら、どうするのか？ということなのです。使徒たちが福音を伝える時に、終わりの日に近づいているということを知っている彼らに与えられたのは、「この肉体が生きている時に主が来られたら、その体が変わる、変貌する。」という啓示なのです。

主が、高い山で栄光の姿に変貌されましたが、私たちもこの肉体を持っていながら、栄光の姿に変えられることです。午前礼拝でも引用しましたが、ピリピ 3 章でも、はっきりとパウロが語っています。「3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」主が天から降りて来られる時、すなわち教会の携挙の時に、私たちが主と同じ栄光の姿に変えてくださるのです。

⁵² 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

「終わりのラッパ」とあります。これは、終わりの日のラッパということですが、神のラッパが吹き鳴らされます。ラッパが吹き鳴らされる時、旧約の時代は、荒野の旅でイスラエルの民がそれぞれ生活を営んでいる時に、これから旅路に行くぞというしるしとして、召集するためにラッパを鳴らします。戦う時も鳴らします。そのようなラッパを、教会の聖徒たちが集められる時に吹かれます。そこには、信じて既に死んだ人もいます。生き残っている人々もいます。死んだ人たちはよみがえり、生き残っている者たちは変えられます。ですから、どちらにしても栄光の体を持つことになります。

そして、その変えられることですが、「一瞬のうちに」とあります。ここには、「アトムス(ἄτομος)」というギリシア語が使われています。英語のアトム、つまり原子がこの言葉から来ています。元々は、「もう分割できない最小のもの」のような意味です。つまり、一瞬と言いますが本当に一瞬です。私たちは、アメリカにいた時に、教会の携挙の説教を聞いた時に、喜んで、「携挙の準備をしようか？」といって、冗談ですよ、飛び跳ねる運動をしたりしましたが、そんな時間も何もないのです。

⁵³ この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

「着る」という言葉を使っています。イエス様を信じて、新しい歩みをするということについても、エペソ 4 章で「古い人を脱ぎ捨てる」「新しい人を着る」と言っています(22-24 節)。この天地が新しくされることについても、ヘブル 1 章で、古い天地は衣のように擦り切れて、神が外套のようにそれらを巻き上げて、新しい衣に取り替える、ということを行っています(10-12 節)。同じように、今の体が朽ちるべきものなのだけれども、必ず朽ちないもの、死なないものを着るのです。

2B 死に対する勝利 54-57

⁵⁴ そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」⁵⁵「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」

すばらしい勝利の宣言です。初めの引用は、イザヤの預言から。次の引用は、ホセアの預言からです。私たちは、人類の歴史が始まった時以来、戦争状態にあります。悪魔がその敵であります。それ以上に、パウロは、26 節で、「最後の敵として滅ぼされるのは、死です。」と言いました。死こそが、私たちに悲しみ、涙、嘆き、苦しみ、恐れをもたらすものです。イエス様が、死者の中からよみがえられた時に、最終的な勝利の始まりでした。罪がもたらす死を、死もろとも呑み込んでくださったのです。死のないいのちを現してくださったのです。そして、主が再び来られる時に、私たちはその勝利を手に入れます。天地も新しい天地に変わり、死と陰府が非の池に投げ込まれ、死を宿していた海もなくなり、新天新地が現れます。こうして勝利します。

⁵⁶ 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。⁵⁷ しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

今、言いましたように、死は罪によって来ました。イメージとしては、罪を持っている死という名の魚を、義を持っている復活という名の大魚がすべて呑みこんでしまった、という感じです。そして、「罪の力は律法です」とありますが、パウロは、ロマ書で語った福音を、ここでも披露しています。つまり、律法は罪を示すことをすれ、罪に打ち勝つ力は与えないということです。したがって、律法を守ろうとすればするほど、自分の罪深さが明らかにされ、自分は救いようのない存在だと知る、ということです。

けれども、主イエス・キリストによって勝利が与えられました。それは、律法の要求を十字架の死によって満たして下さり、また、よみがえりによって死そのものも、いのちによって呑み込み、滅ぼしてくださったのです。

3B 無駄に終わらない労苦 58

⁵⁸ ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。

すばらしいですね。すごい勝利の宣言でしたが、その将来に起こることを、たった今の、主のわざに引き落としています。「私の愛する兄弟たち。」とあって、一部の霊的エリートに語っているのではなく、教会の普通の人々に語りかけているのです。私たちの学び、聖書の教えを学ぶことが、このように、たった今行っていることに直結しているかどうか？であります。使徒パウロは、絶えず、

今の営みに、偉大な真理を消化させています。

「**堅く立って、動かされることなく**」と励ましています。パウロがコロサイの人たちに、書きました。「1:23 **ただし、あなたがたは信仰に土台を据え、堅く立ち、聞いている福音の望みから外れることなく、信仰にとどまらなければなりません。**」信仰に土台を据える。そこに堅く立つ。そして、福音の望みから外れることなく、信仰に留まるということです。私たちの生活で、その信仰が揺るがされることがしばしば起こります。実際的な思い煩いもそうです。自分の日常の事で忙しくなって、福音がどこにいったのか？というぐらい、口では信じているといっても、行いが他のことを信じていることが明らかになることがありますね。または、福音の真理が、それを信じたらまるで悪いことであるかのような取り扱いや圧力を受けます。そうすると、いつの間にか真理を曲げる、あるいは混ぜ物をする誘惑も受けます。

そして、そういったことに揺るがされていると、「**いつも主のわざに励みなさい。**」ということがおろそかになってしまうのです。私も、心が乱されるようなことがありました。それで、自分がふさわしくないと感じている時に伝道の働きをし、神がふさわしい者にしてくださるのだと知りました。いつも、主のわざに励むのです。揺るがされることがありますが、それでもしっかり福音に立って、主のわざに励みます。

そして、「**自分たちの労苦が主にあって無駄でない**」と言っています。前回の学びで、死者の復活を否定する者たちが、今の命のことしか考えていないので、どうせ、明日は死ぬのだから飲み食いしようとして、罪の生活を歩んでいたことを見ました。その反対に、死者の復活を信じていると、主のわざに励むことができる望みがあるのです。それは、「報い」があることです。死者の復活があるからこそ、報いがあるのです。私たちの良い行いの動機が、人に見られるため、つまり、人がどう反応するかを気にしながら動いていたなら、すでに報いを受けているとイエス様が言われましたね。そうではなく、天の父が見ている、報いてくださると励まされました。

労苦というのは、その報いが見えにくいものです。特に愛の労苦は、むしろ報われないことが多いです。キリストの愛は、罵られている人にも罵り返さないような、敵をも愛することだし、だれも報いてくれないところで労苦するからです。「ヘブル 6:10 **神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。**」不公平に見えるようなことが、労苦の中で立て続けに起こります。しかし、主はその働きや愛を忘れたりしません。必ず、報いてくださるのです。